

<国内情勢>

佐藤鐵太郎 海軍中将

忘れられた「海主陸従」の国家戦略家

—中編—

藤 井 巖 喜

(国際政治学者)

黄海開戦と日本海海戦における活躍

佐藤の海軍軍人としての経歴を見てみよう。

1866年（慶応2年）生まれの佐藤は、1887年（明治20年）海軍兵学校を4番で卒業している。1889年（明治22年）、海軍少尉となる。

1892年（明治25年）、海軍大学を首席で卒業。同年、海軍大尉に昇進し、「赤城」航海長となる。1893年（明治26年）には、初めての著作『国防私説』を完成している。1894年（明治27年）、黄海開戦に参加。敵弾により、右肩に負傷。1896年（明治29年）、陸の勤務に戻り、海軍省軍務局第1課に勤務。

1899年～1900年（明治32年～34年）、英国と米国に留学。1901年（明治35年）、海軍大学校教官。この年、『帝国国防論』を明治天皇に献上する栄誉に浴している。1905年（明治38年）、日本海開戦に参加。この時のエピソードが伝えられている。佐藤は第二艦隊の参謀として、日露戦争に出征している。

第一艦隊司令長官兼、連合艦隊司令長官は言うまでもなく東郷平八郎大将であり、その首席参謀は秋山真之中佐であった。

日本海海戦では、バルチック艦隊は対馬海峡を通過した。しかしバルチック艦隊が対馬海峡を通過するか、あるいは太平洋側を通り、津軽海峡から日本海に入る

かの見通しでは、海軍内も大きく意見が割れていた。連合艦隊の参謀の大勢が津軽海峡説に傾きつつある時、これに強力に反対したのが第二艦隊の参謀であった佐藤鐵太郎であると伝えられている。

佐藤は対馬海峡でもう一日、待つことを提案し、「もし5月26日以降もバルチック艦隊が消息不明の場合は隠岐近海で待ち受け、対馬海峡・津軽海峡両方の場合に対応すべきである」と訴えた。ところが5月25日、バルチック艦隊付属の輸送船が上海に入港したことが判明し、がぜん対馬海峡通過説が有力となった。

強力に「5月26日まで対馬海峡への移動を待つべし」との佐藤の意見が連合艦隊の勝利に大きく貢献したと言われている。

佐藤鐵太郎自身の著作を読む

著作における彼自身の言葉を聞いてみよう。

1892年（明治25年）、日清戦争以前に書かれた『国防私説』で佐藤は既に、明確な海主陸従の国防戦略を打ち出している。佐藤は海主陸従の戦略論を14のポイントにまとめているが、この要点のいくつかを抜き出してみよう。

- ☑ 海軍をもって海国を守る時は、その兵員、陸軍よりも多きを要せず、従って生産の事業を妨ぐることなし。
- ☑ 海軍強大なる海国は、敵兵をして一步も国内に侵入せしめざるを得。故に、交戦の際と言えども、全国の人民・・・国産の繁殖に従事することを得。
(経済活動に専念することが出来る)
- ☑ 陸軍は平時にあつて適切の用をなさず。(平時はやることかない)
- ☑ 海軍は、平時四方に航海して、国威を示し我が信用を高め、商業の発達を促進し、我が漁業を保護し我が商船、在外商民を保護するの任務を有す。
- ☑ 海軍の戦いは、激烈なりといえども、国内に戦うことなきを以て、民産を損することすくなし。(民間の経済を破壊することが少ない) 故に国乱に際し、海軍を以て戦うものは民力の疲憊を戦後に残すことすくなし。

- ☑ 海軍は、海国国防の主力たるは論を待たずと雖も、大陸諸方を併合し、我が版図を内地に拓るの力なし。故に大陸侵略主義の兵備においてはこれを主とすること能わず。(海軍は元来、侵略主義的ではなく、防御的である。)

次に参照するのは、佐藤鐵太郎の主著『帝国国防史論』である。1910年(明治43年)に完成版が出版された佐藤の代表作である。日露戦争後、ユーラシア大陸東部への進出が、当然の国策とされてゆく風潮に警鐘を鳴らし、我が国は英国に倣った海洋貿易国家として発展すべきであるとの論を展開している。この為に豊富な歴史上の事例を列挙している。佐藤は言う。

- ☑ 要するに英国は、自強拓開を以て主義とし、大陸征服の壮挙を避け、富を洋外に求め、遂に今日の隆盛をいたせる国柄である。
- ☑ 然るに英人はよく先哲の遺訓たる海洋主義を遵奉し、欧州大陸に対する欲望を勇割し、その対岸諸強国が相変わりにて征服を行なわんとするに忙しきを機とし、専ら海上における威力を要請し、その攻めやすく守りやすきの地を拓き、天府を拓発して、その遺利を収め、巧みに海洋主義と自強との意義を消化し、遂に相捏して一団となし、もって今日の富強としたのである。

また『帝国国防史論』では朝鮮半島および満洲に対する発展論を以下のようにして批判している。

- ☑ 国防上よりこれを見れば、寧ろこれを捨つるの利益多きを認むるのである・・・これが為、国防上、必要なる海上武力を削減するも、なお且つこれが維持を務め、これが為、国防の危機を悄然とするに至りては、大いに留意せざるべからざる次第である。

(満洲・朝鮮の経営に力を要するあまり、海洋国防がおざなりにされてはならないと指摘しているのである。また佐藤はこの中で、朝鮮およびチャイナに関しては、現地人にその経営を任せ、またロシアからの脅威に対しても現地人と友好を強化し、ロシアの南下政策に対抗させることを以て最善の策としている。)

- ☑ 我が国および英国の如き島国は、世界的大国として永遠に存続しうべき天与の恵福を有するが故に、十分この点に注意し、この典型を失せざるを期せざるべ

からず・・・これを要するに、我が帝国の軍備は自衛および発展の二意義を同一軌道内に見るべき唯海主義を以て判断すべきは、毫量も疑いなきところである。

大正6年刊の『波上の日本』では、第一次大戦におけるドイツの失敗を次のように論じている。

- ☑ (ドイツは) 海上がしばらく英国に任して大陸に必勝の準備を整え、まず英国をして自国の敵たらしめざる手段を講じ、仏露両国を一蹴しざるの準備を十分に整え、その準備なって後に戦いを起こしたならば、必ずその目的を貫徹しえたであろう。
- ☑ 英国が軍備縮小を定義するも、(ドイツは) これを入れず、英国を相手として英国をして、巨万の資を投じてその海軍の拡張を行ない、この為に陸軍の拡張を緩くし、英国をして此の際、ドイツに大打撃を与えねば、到底その国運を維持するに道なきを知らしめたのである。

分かりやすく言えば、ドイツは海軍軍拡をやらずに、英国と協調政策をとり、英国がヨーロッパ大陸内の戦争に干渉しないように取り計らう。

そしてドイツは国力を陸軍の充実に集中し、その上でフランス・ロシア両国と戦争していれば、第一次大戦を勝利に導くことが出来たであろう。

これが佐藤の見るところであった。

大正8年刊の『久遠の生命』なる著書では、日本民族と漢民族(支那人)とは根本的に異なり、日支提携が難しいことを指摘している。佐藤は第一次大戦後の世界が、最終的には黄色人種と白色人種の戦いになるというような説を否定している。当時の日本では、チャイナや朝鮮と提携して、密接なる関係を結び、白色人種に対抗しなければならないと説く人もいた。

佐藤はこれを否定して、次のように語っている。

- ☑ 私はそんなことでは駄目だと思う。支那人と日本人とは、根本的に異なつたる観念を有しているから、無理に提携して、全然融合するには非常なる長年月を要すると同時に、支那人はあまり多数であるから、中々思う如く密接なる関係

を結ぶことは困難である。ドイツがポーランド人を併合して今日まで同化することの不可能であったのと同理である。

- ☑ しかしながら、日本国民は東洋のリーダーである。リーダーといえは後に続く者があるようであるが、一人でかまわぬ。6, 000 万の同胞、同一の考えになったならば全世界といえども、何の恐るるところはない。決して支那人から救いを求めずともよい。
- ☑ 私は日本国民の結合を固くして、思想を統一し、同じ道に向かって導いてゆけば、必ず心配することはないと思う。

日本民族と朝鮮民族、また漢民族も、本性が異なるから提携などは安易にできないとズバリ本質的な議論をしている。大した見識である。

また、昭和 13 年に出た『日本民族の世界的使命』を見ると、欧州文明も支那文明も共に覇道文明であり、日本文明とは異なっていると指摘している。

- ☑ (欧州文明は) 覇道をもって一貫する。しかもその内容においては、同一種層中の二派とも称すべき、欧米文明とシナ文明とは、今更これを細説する . . .

つまり欧州文明と支那文明は共に覇道文明であり、その中の分派に過ぎないと総括しているのである。こうなれば当然、漢民族との提携は不可能であるということになる。現在の文明論の見地からしても、ヨーロッパの文明もチャイナの文明も、共にユーラシアの大陸文明の属種であり、日本文明とは随分異質のものであると認識できる。

ただ日本は地政学的にはイギリスと似ているのであり、異文明には属するが、近代国家の発展の方向としてはイギリスの方向を目指すべきだということであろう。今日の時点から見ても、見事な歴史観であり、見事な文明論である。

そして具体的な国家戦略についても明快である。日露戦争以後、日本がこのような国家発展論をとっていたならば、大東亜戦争敗戦の惨禍には至らずに済んだものと、嘆息せざるを得ない。